

奈良先端科学技術大学院大学
附属図書館アドバイザー委員会（第8回）報告

1. 日 時 平成15年1月24日（金）14時00分～17時00分
2. 場 所 奈良先端科学技術大学院大学事務局3階大会議室

3. 出席者

<アドバイザー委員>

- 雨森 弘行 (名古屋女子大学常務理事)
今井 秀樹 (東京大学生産技術研究所教授)
田屋 裕之 (国立国会図書館関西館事業部電子図書館課長)
土屋 俊 (千葉大学文学部教授)
寺田 浩詔 (高知工科大学副学長)
根岸 正光 (国立情報学研究所 学術研究情報研究系 人文社会系研究情報研
究部門・教授・研究主幹)
美濃 導彦 (京都大学学術情報メディアセンター教授)
宮原 秀夫 (大阪大学大学院情報工学研究科長)
山本 修一郎 (株式会社NTTデータ技術開発本部副本部長)
(欠席)
松村 多美子 (椋山女学園大学文化情報学部教授)

<大学出席者（陪席等）>

- 安田 國雄 (副学長)
山口 英 (附属図書館長、情報科学研究科教授)
砂原 秀樹 (附属図書館運営委員、情報科学センター長)
西谷 紘一 (附属図書館運営委員、情報科学研究科教授)
関 浩之 (附属図書館運営委員、情報科学研究科教授)
高橋 直樹 (附属図書館運営委員、バイオサイエンス研究科教授)
大城 理 (附属図書館運営委員、先端科学技術研究調査センター助教授)
羽田 久一 (附属図書館研究開発室助手)
森島 直人 (附属図書館研究開発室助手)
北田 憲治 (事務局長)
今田 幸二郎 (総務部長)
佐藤 行則 (研究協力部長)

田保橋 良 (庶務課長)
貝田 辰雄 (会計課長)
藤原 彬 (施設課長)
中嶋 昭雄 (研究協力課長)
前田 和丸 (学生課長)
末次 美知夫 (学術情報課長)

4. 配布資料

1. 附属図書館アドバイザー委員会委員名簿
2. 奈良先端科学技術大学院大学附属図書館アドバイザー委員会要項
3. 奈良先端科学技術大学院大学附属図書館アドバイザー委員会(第8回)議事要旨
4. N A I S T附属図書館(電子図書館)の現状
5. N A I S T附属図書館(電子図書館)の将来構想
6. N A I S T電子図書館レポート2002
7. 奈良先端科学技術大学院大学電子図書館概要
8. 奈良先端科学技術大学院大学2002ガイドブック

議事に先立ち、副学長から開会の挨拶が行われた。引き続き館長から挨拶の後、本学出席者及び陪席者の紹介があり、新たにアドバイザー委員に就任された方の紹介が行われた。

5. 議 事

(1) N A I S T附属図書館(電子図書館)の現状について

館長から、配布資料4に基づき、電子ジャーナル契約状況、著作権許諾状況、電子化進捗状況及び電子化資料へのアクセス状況など、現在の附属図書館の現状を表すさまざまなデータをもとに報告があった。

(2) N A I S T附属図書館(電子図書館)の将来構想について

館長から、配布資料5に基づき、附属図書館の将来的なところをどのように考えていくかということについて説明があった。

(3) 意見交換

意見交換(提言・意見)の概要

各委員から、附属図書館(電子図書館)の将来構想やこれまでの活動などについての意見等が寄せられた。

委員の主な意見等は、次のとおり。(◎印付きは、アドバイザー委員からの意見等)

【電子図書館をとりまく環境の変化】

◎ ずいぶん世の中が変わってきて、すっかりやることも、変えていかななくてはならないという状況になってきたわけですが、そうなりますと従来の電子図書館の概念とはかなり違ったものを作っていかななくてはならないということだと思います。

◎ 図書館の仕事は従来の図書館の域を越えてきています。情報関係、インターネット関係に広がってきているわけです。さらに私は思うのですが、将来の評価機構などに対応する教官の業績データベース管理のようなものがどんどん増えてくると思うのです。独法化するとそういう問題が出てきますが、具体的にいうと教官のデータベースみたいなものの管理はどこでやろうとしているのか、また、そのスタッフの確保をどうしていくかという問題があります。

【従来の図書館の機能実現の全体像】

◎ 附属図書館あるいは大学の図書館として、普通求められている機能をどういうかたちで実現していくかという問題についての全体像について伺いたいと思います。

例えば、専門性のある図書館ということだと、重要なのは専門分野でのレファレンスができることで、もちろん日本の学問は、教員が全部ライブラリアンの仕事を全部やってしまって、資料を探し回るという伝統があるのは事実ですが、そういうことをすればたぶん研究の生産性は上がらないはずなので、当然レファレンス・ライブラリアンの情報科学や生命科学などの分野において、資料面から研究をサポートするような人材が必要になるだろうと思います。その人たちが、レファレンスができるような環境、例えばデジタルな環境でやるにはどうなったらいいとか、そういうことがきちんと実現できると、この大学はベストな環境のはずです。ユーザーから見たときに図書館に期待するときのインターフェースになるようなレファレンス・ライブラリアンが必要だと思います。

◎ 図書館全体として紙のものというのはどうしても残るわけです。場合によっては便利なことがある面もある。スペース的な問題も当然出てきます。例えば図書館の資源の中でレファレンスをどう位置づけるのか、どういうふうに人材確保をしていくのか、もし、附属図書館が研究支援という重要な基盤整備とすれば、どの辺のところを大事にして、どの辺を電子化や情報化というところに持っていけるのかというようなビジョンが全体としてあったうえで、新規事業の話がないと、むしろここにいる先生たちが不安に思うのではないかと。

◎ 人やお金がなくなる中で、最低限必要とされる伝統的な機能をどう確保するかとい

うのは、大事なことだと思います。

◎ 人文系や理学系の方は、ずっと残っているということをすごく重視されます。私も、最近それは大変大事だと思うようになってきているので、確かに新しいところに行きたいというのと同時に、やはり古いものを残すということに、情報のテクノロジーをもっと使ってもらえないかという提案がほしいと思います。

[授業のオンライン化]

◎ 授業のオンライン化に大変興味があります。もちろん、資料も入っていて黒板の記録も全部入るようなアーカイブを作って、ためしに公開しているのですが、あまり使われないのです。これを図書館にためていって、いわゆる文献を集める価値と比べて、そういうものを集めていく価値が、私は、新しい話なので考えなくてはいけないと思っています。そもそも、どういうふうを考えていったらいいのでしょうか。もし、その辺のアイデアがありましたら聞かせていただきたいと思います。

◎ 授業のアーカイブはほかの目的がいろいろあるのです。だから図書館というところ集めるということに対して、反対に少しファンクションが違うのではないかという気がするのです。図書館ということ考えたときに、それをずっと残していって、アーカイブをしていって、そこに価値を見出せるのなら図書館の仕事でしょうという気はするのですが、今、アーカイブやビデオ、特に授業などの話はいろいろな意図があって取るわけです。そうすると、ある意味図書館でやるのが適当なのかという議論が出てくるのではないかと思います。

[電子図書館のパイロット事業の役割及び今後の方向性]

◎ ここ数年の電子図書館というもののコンセプトづくりの中で、奈良先端大のパイロットプロジェクトが果たしてきた役割は大きいだろうと思うのです。

大学全体の中での図書館の機能というものが位置づけられていて、まずそこで例えばレファレンスやしかるべき機能を、しかもできれば電子的に実現したうえで、ほかの部署、大学におけるほかの活動との連携で行うべきことを積極的に推進するのはいいわけですが、今までの電子図書館のイメージを次に移すときに、突出した部分だけの話だと非常に不安になってくるのです。要するに、今までの奈良先端大の電子図書館というのはこんなものだった、よく見てみれば「わずかの人が使っている」だからこういうふうに変えるというイメージがほしいと思います。

◎ 使わないから、使う人がいないからどうのこうのという話ではないと思うのです。具体的にいうと、例えば1人使っても、その人が講義に出られなかった。だからその講

義を見て単位が取れば、それは非常に有用なことなのです。ですから、使ったアクセスがあったかどうかというようなことだったら、アクセスのないものはどんどん削除され、削られていきます。

図書館にはそういう機能があるから、図書館としてそういうサービス機能を提供しますということです。いろいろな可能性があるサービスを提供するというのが図書館で、その中でそれを使っていくかというのはユーザー側である教官側の、あるいは学生のことなのです。

一つのモデルケースとして、それを理想的なモデルケースと見るかどうかというのは我々の判断です。

[大学全体としての情報基盤整備と電子図書館が果たす今後の役割]

◎ 大学全体としての情報発信、あるいは学生や教官に対する情報サポートの一環として、統合して考えるという立場が最初にあるべきではないかと思えます。やはり大学全体としての情報基盤をどうするのかということをも最初にやるのがいいように思えます。

◎ 今まで奈良先端大の電子図書館の研究開発で、ある1つの方向性だと思えますが、かなり努力をされてきていて、そこそこに成果を上げてこられたのだと思うのです。しかし結果的には、確かに少し利用面等あるいは外部の環境の変化で、路線を変えなければならぬところが出てきて、従来のあたりまえの図書館の機能を含めてもう一度考えてみようという局面に差し掛かっているのかなという気がしています。

その場合に、今までの奈良先端大という大学院大学自体の特色を生かしながら、今後を考えるというところだと思えます。それぞれ図書館には図書館の特色があって、それを守っていくというところはあると思うのですが、図書館の基本的な機能として、学生へのサービスあるいは教職員へのサポート、情報資源の蓄積等、やはりサポート機能というものが大きいと思うわけです。

今、路線を変えるときに、こういうふうにしたいということを中心にダイナミックに考えていると思えますが、私も対外部分というものが結構あるという気がします。そこに対する学生や教職員の声を、路線変更する場合に、今、図書館に対して何を求めるのかというヒアリングや調査を、かなり徹底して行ってはどうかという気がします。ユーザーの声をきちんと把握されて次のステップに進むことも大事かという気がしております。

それから、情報資源の保存について、国会図書館関西館もこの近くに10月にオープンしたところで、当初から科学技術の関係はかなり持っていて、300万点近いテクニカルレポートなどを持っていて、雑誌は外国のものを中心に約5万タイトル持っています。これらを含めて構想の中に入れて考えてもよいのではないかと思います。

◎ 電子図書館といっても、実は学内のいろいろな情報サービスに使えるし、さらに情報発信の道具にも十分適用できるだけの力を蓄えてきたのだということがあると思うのです。そういう意味でも、奈良先端大全体として見たときに、今の電子図書館がいったいどういう役割を果たせるかという観点からもう一度見直すと、与えられた予算を図書館のためだけに使うということではなくて、実は大学全体のリソース配分を見直すと、さらにもう少しこれぐらいの予算を今の電子図書館部門に与えることで、大学院大学全体としてはむしろ経済的な運営ができる可能性があるとする、3000万円などという額ではなく、少し増えた額が入ってきて、それで大学院大学トータルとして見ると、より経済的な運営ができる可能性があるという話もあるわけです。

それから、もちろん旧来、図書館として果たしてきた役割もあるわけですから、その部分についてはどうするのかということがあると思います。そういう点で、マイライブラリーという機能は非常にわくわくするような部分がありますので、ぜひ伸ばしていただきたいと思います。そういう意味でも、従来の図書館のあたりまえ品質を超えた情報サービスをどうするかという観点も含めてぜひご検討いただきたいと思います。

もう1つは、このような強力な技術やサービスを提供できるので、図書館連合に対する提言などがあると、非常にいいのではないかと思います。

◎ 方向性として、やはり新しいかたちの学習形態の中で今までの蓄積をどう生かしていくか。マイライブラリーだけを出すのではなくて、その辺のビジョンを出していただきたい。東大出版会というのは、結構権利をとっているはずですから、そういうものを含めてやればよいと思います。

◎ 図書館連合を作るという話に関連して、本の小売店の立場から見ると、電子図書館というのは実に嫌な、けしからんというものであったわけです。是非本の小売の方等もよく考えていただいて、そのあたりとも協調して、何かうまいビジネスモデルを作っていただけるといいなと思うわけです。

[社会貢献及び地域貢献]

◎ 世の中にはまだ、電子図書館機能というのはいったい何なのかということについての確立された定説があるわけではございませんし、私もかつて東大の情報基盤センターを作りましたときに制度面で直接かかわりまして、学内でずいぶん議論をしました。いったい電子図書館機能というのは何なのか、何を実現するために情報基盤センターを作って、図書館はわざわざ貴重な定員までひっぱりだしてそういう新しい組織に参加するのかと、ずいぶん議論があったわけです。そのときにも、やはり今議論になっているように、授業のデータベース化ということも意見としては出ておりましたが、まだその当時は本当に、いわばよそ事のように受け止められる雰囲気がありました。しかし、NA

I S Tが今後、新しいフェーズに入ったのだ、そして、ここでは電子図書館機能というものをこういうふう新しい時代の流れに合わせてとらえなおして、こういうふうやってみようと思うのだということでチャレンジすることは、私は大変結構なことではないかと思っています。

ただ、そのときに、今日の課題の中にも出ておりますが、やはり今まであまりにも一大学で破格の国家予算を独占的に使っていたということは、N A I S T自ら制限していただかないことには、どこの大学も腹のうちでは「やはりそれは大変不平等であり、バランスを欠いたことではないか」と思っていて、今まで私は多くの人からそういう意見を聞いていました。ですから、その反省に立つということは大変大事なことではないかと思えます。

著作権の問題は、このアドバイザー委員会が始まった当初に、よその大学や一般社会を含めて、インターネットを通じて利用することができないのかと申し上げたことがあるのですが、やはり契約上それはできないということで、それがせつかくN A I S Tが学内的には先進的な研究開発を行って、その成果に基づいて高度なサービスを展開していたにもかかわらず、外から見ると、そこに膨大な国家予算を投じただけのメリットが何もないではないかと。そういう批判を生じさせてきた原因も、そこにあるのではないかと思うのです。

ですから、少なくともこれから新たに契約するものについては、単なるクローズされた利用ではなくてオープンになるような、例えば、東大の情報基盤センターがスタートしたときに、図書館は「ブックコンテンツ」というサービスを開始したのですが、これは国内の書店と特別な契約を結んで、東大の学内者だけが使えるものではなく、全部オープンにするということも織り込んで契約したわけです。そういうような努力をさせていただいたらいいのではないかと思うのです。

今のほとんどの国立大学では、社会貢献や地域貢献ということも非常に大きな柱になっているわけですが、ほとんど俎上に載っていないところをみますと、地元の奈良県やそういうところからのニーズがまだ盛り上がっていないということなのか、あるいは潜在的なニーズがあっても大学の方で抑えているのか、そのあたりを聞きたいと思えます。

◎ これほどのことをやるのだったら、これだけのお金があると証明にもなるわけです。きちんとしたものをやるのにはそれだけのお金がいるという認識をしてもらわなかったら、いつまでも貧しい気持ちでいたら、日本の国のものは一つもよくなりません。

これは一つの提言なのですが、アカウントビリティを保つためには、きちんとしたレビューコミットティで一度評価されてみる、図書館では、きちんとこれだけのお金を使ってこれだけの成果が上がったという外部評価を受けるというのも一つの案ではないかと思えます。

◎ 今まで、学内限定の許諾という話で、かなりの予算を費やしたにもかかわらず、それについての十分な国内外、主に我が国の別の研究機関等からのアクセスが限定されることによって、これで十分なのかという声があるという話でしたが、それと同じようなことが今後起こりうるのではないかという危惧を、今、私は持っているわけです。

アプローチとして、東大出版会に話をして電子化させていただくとか、それを提供するのに対して同意していただくということで進めるのはいいと思いますが、図書館ということで考えてみますと、1つの出版社や、あるいはその出版社が持っている幾ばくかの本をデジタル化することが全体にとってどの程度の意味があるのか。おそらくかなり、何万とか何十万という研究リソースの中で初めて、どれが必要かということを経営者はピックアップして、それが研究として役立っていくというところですので、限定的なものをデジタル化してそれを出すというのは、新しさはありますけれども、実はそのプロジェクトに関して言うと全然新しくないような気がするのです。今後それを継続していったら予算をかけていくとき、ずっと進めていくときに、その手間や割り当てられる予算や人手できちんと業務を果たして、世の中に自信をもって訴えられるものにもものになっていくという見込みを持ったうえで進める方がいいのではないかという気がします。

[研究成果の公開]

◎ 情報として申し上げますが、MITのオープンコースウェア・パイロットというのがあるわけですが、MITの場合は、同時にDスペースというものを立ち上げるわけです。ですから、要するに大学の教育マテリアルというものを出していくという話と、研究成果を公開するという話とは、たぶんあい携えるべき性質を持っているというのが、アメリカのリサーチユニバーシティの現在の認識だろうと思います。

確かに研究者の方々はそうお思いである可能性はあるわけですが、「それではなぜこういう雑誌に出して、自分の論文が載った雑誌を買うために、こんな高いお金を払っているの」という話も当然ありうるわけです。例えば、現実にアメリカの国立機関の関係者は、たしか権利を排他的に譲渡してはいけないはずなので、非排他的な譲渡契約を持っているのです。それと同じようなことが、日本では全然力関係が違うのでできないという話もありますが、奈良先端のような大学は、しっかりした方針を立てて大学として取り組めば、可能になるのです。それで世の中の状況はずいぶん変わっていくだろうと思います。